

一 書院、台子、草庵にいたるまで、曲尺割の数を定めるには、根本を何の曲尺に基づけて究めたものか、人皆知らぬので、事にあたつて当惑するものと見える。

およそ天地には、順行の曲尺がある。四季に土用を加え、節を五つ立て、四方に中央を加えて五つを立てる。一日を辰より申の五時に分け、夜を五更に分ける。陰陽は五氣にあらわれ、人も五つの体を受ける等々に基づいて、五つ曲尺を規定とし、大も小もこの曲尺と違うことがないのだ。

五は陽数である。形にあらわれるものは陽である。この五つ曲尺の間にそれぞれある六を陰の曲尺とする。本式では、陽の五つを用い、六は常には用いぬ。草庵の茶の湯では、台子本式書院での格式を元とするとはいえども、陰陽ともに用いる理ことわりがある。書院、台子においても陰陽ともに用いる理に基づいてのことである。その理を会得しなれば、必ず相違が生じる。ねんごろに根源を究めるなら、どのようにならでも自由になれる、という。

たとえば、真の書を習得し、その後、行、草に至るならば、いかに自由にくずし、やつしても本性より外れることはない。草書の仮名ばかり習つて、筆法も画法も狂つて行き、本性を失うことが多い。まず第一に、真の書を鍛錬すべきである。されど、人それぞれで修行は変わるもの。古人に、草書の妙を得、行書の妙を得、仮名文字の妙を得たものがある。草、行、仮名であっても、妙所に至るほどの人であれば、不得手とはいえず、真の書の本性をわきまえるほどの境地に至るのだ。真より入り、草より入り、行より入り、曲尺より入る。その入口は変わつても、奥儀は同一

である。

その入口は、入る人の生まれ持った性質に従えばよい。たとえば、老人、働き盛りの人。必ず、真からのみと思ひ込み、書院、台子の道具や技術をひとつひとつ習熟、鍛錬し終わり、さてその後、草庵を修行すべし、とひたむきに取り掛かつては、一生かかっても草庵の風味に至れるはずはない。師たる人、よく料簡すべきである。仏が衆生を救済するようなもの。大乘の機、小乗の機にそれぞれ応じ、頓と漸との引導の違いがあるようなものである。諸具のあしらいなど、ことごとく知ろうとして、かえって物にとらわれ、過ちを犯すのだ。

ただ、草庵の主であっても客であっても、始終の大法を一通り習い覚え、道具も一つ二つを極め、自分が持つ、しかるべき道具を師と相談して、置き方、兼ね合い、取り扱いの一通りを身につけることは、老人や働き盛りの人にもできること。その上で、本心の会得を深く心入れして努めれば、修行が進み、まもなく茶になるものである。この修行は、書院の行き方とは違うので分別すべきである。

くれぐれもいうが、茶の湯の深みは草庵にあるのだ。真の書院台子は、格式、法儀を嚴重に調えた、世俗の法である。草の小座敷、露地の一風は、本式の曲尺に基づくとはいえども、ついには曲尺を離れ、技を忘れ、心が無味に帰する世俗を出る法である。こうはいったが、壮年や余裕のある茶人が、へたに心味ぶって、知るべき事を知らず、取り扱ひも覚束ないようでは、ただ不相応であるとかいえぬ。本当は、事と理とは別々のものではない。事が熟せば心が熟し、心が熟せば技が熟す。技は上達したが、心いまだ至らずというのは、技もいまだ妙所に至っていないからなのだ。心が熟すも技至らず、というのも、心がいまだ妙に入っていないからである。

これは仏の道でも深く会得すべき一段である、という。

二 数奇屋にて、初座、後座^三の趣向。利休が、初は陰、後は陽、これぞ大法である、といった。初座では、床に掛け物、釜も火相^三衰え、窓に簾かけ、みなみな一同、陰の体である。主客ともに、この心である。後座は、花を生け、釜も沸き立ち、簾を外すなど、すべて陽の体である。このような大法ではあるが、天氣の晴曇、寒温暑湿に従って体を変えることは、茶人の料簡による。たとえば、鬱々とした天氣などの時、初座で簾を外し、突き上げをあげ、花を生けなどする^四ことがある。されど、ひと向きにこれを陽と心得てはならぬ。火相をもって第一とするゆえ、このよ
うな体は、陰中の陽というのだ。この時であつても、後座を陰とすることはない。

右は、火相によつてわきまえるのだ。天地の間、寒暑^二気も、春夏の温暑の時も、ふと寒く涼しいことがある。秋冬の寒冷の時も、ふと暖かな日がある。そうはいつても、春を秋とはいわず、夏を冬とはいわないようなものだ。一季の内の「変」だからである。よくよく分別すべし、と利休がいつたところ、同席の大林、笑嶺和尚がこれを聞き、「まことに、教外別伝^五の境地、大悟の茶と申すべし」と感心したということだ。

三 器の数、初座後座ではどのようにすべきか、と尋ねたところ、宗易は、

「台子書院は、昼は曲尺も数も陽を用い、夜は曲尺も数も陰である。その上、祝儀、懐旧、仏事など、それぞれに口伝があるものだ。かたや草庵は、小座敷なので物数も少ない。数は考えなくてもよいのではないか、と紹鷗とも相談したが、初座は陰、後座は陽との区別もあるので、数も調半(奇数偶数)をもつてよく考慮すべきである。歌に、

ゝ床は床^六座席は座席棚は棚

二調一^半二^半一調

とある。これにて得心するとよい。
または初座では、

床に 〳墨跡

席に 〳釜 または風炉でも

棚 〳香合 〳羽篝

となり、二^半一^調である。そうして、床と棚に置く物の数は同じにならぬよう心得るがよい。見栄えがよくない。二^調一^半も右のように心得る。器の多少によらず、書院、台子、草庵であっても、床・棚・座席のそれぞれが、すべて調またはすべて半になることを嫌う。添え置き、曲尺外し^七などで自由にすべきである。」
といった。

四 五つ曲尺のこと。その間それぞれに六を加え、合計十一の曲尺を伝授された時、いまだ陰陽の区別をくわしく会

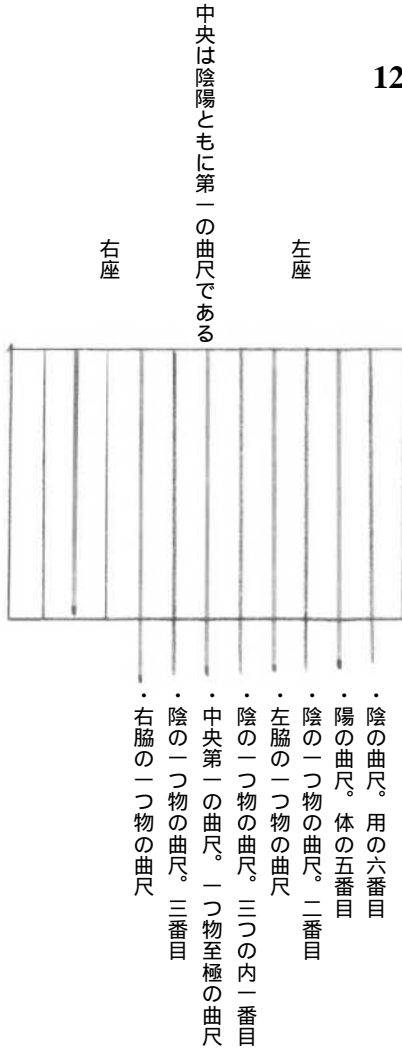
得できていなかったゆえ、戸惑うことが多かった。まず台子の五十種の飾りより、草庵での置き方に至るまで、五つ曲尺のみをもって教わった。これをもって不審晴らし難く、尋ねてみると、利休は、

「よく尋ねられたものだ。感心なこと。五十飾りを知っても、この間の曲尺を理解せねば不自由し、過ちを犯してしまつもの。それがしも道陳に再三問うたものだが、秘事とのみおっしゃり伝授してはくれなかった。紹鷗に尋ねてみると、道陳は教えなかったか、と聞く。秘してお教えくださいませでした、と答えた。紹鷗は「いやいや、そうしたものではないのだ。自分がある時、道陳に尋ねたところ、空海もこのことを何もいわなかった、と答え、はつきりしなかった。宗陳に問うたが、彼も知らぬ。それで宗悟に問うと、この人は珠光に深く心入れして伝授を受けた人であつたので、確かに覚えており、くわしく教えを受けることができた。このように大切なもので、知っている者も稀なので第一の秘伝となつている。」

およそ、三つ割、五つ曲尺までは教えずして、何もできぬので、誰にでも伝えるもの。間の六つ曲尺のことは、話にも上らず、問い尋ねる弟子もない。宗易の代で、秘事を葬り去るわけにはまいらぬ』とて、くわしく相伝を受けることとなった。御坊は心入れ深く、工夫を凝らしているので、このように問い尋ねてくれた。自分が紹鷗に師事した心入れより勝っている。なるほどお伝え申そう。吉日を選び、改めて相伝すべし」

と云つて、天正九年十月二十三日、相伝を受けた。その次第、概略を左に記す。

・十一ある曲尺の内、五つは陽。これを体の曲尺という。六は陰、用の曲尺である。



吉凶で、陽は吉、陰は凶とする。祝儀の時などは無論のこと、書院^ハ、押板^カ、台子すべて陽の飾りである。仏事、懐旧等、陰である。それでも子孫祝賀の心にて、一品ずつは陽に飾る。平常の台子では、いつもいつも陽飾りをよしとする。夜会は陰飾りが本式ではあるけれども、それさえ台子は陽飾りにしても非難は受けぬ。昼の会に、陰飾りの台子、ということはない。

こうした次第であるから、草庵であつても初座後座ともに、陽曲尺と陽数を用いるに限る、との議論があつたが、紹鷗の見識はさすがであつた。しかし、あまりに偏り不自由とも思えるため、陰陽相交えて、初座、後座の分別を持ち、また茶人の体得した働き、捌きなどの面白い趣向もあらば、陰曲尺、陰数を用いてもよいのだ。

さる年、殿下^{一〇}の御曾祖父、遠忌執行に際し、利休に台子飾りを仰せ付けられたが、この図のように、陰飾りにて、羽箒は陽に置いたものだ。